

# A.L.L.通信

アート・ラーニング・ラボ

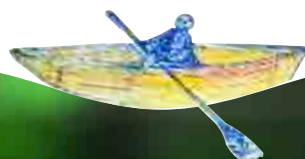
つうしん

APRIL.2025

No.

2

FREE



なんで「ブリロの箱」って、

すごいんですか？

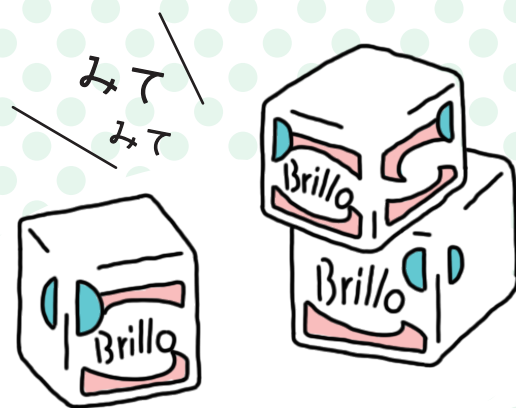


全国から注目を集める《ブリロ・ボックス》が、鳥取県立美術館開館記念展でいよいよ初公開！20世紀の美術の歴史を塗り替えたこの作品を、あなたはどのように見ますか？

〔画像〕ブリロのパッケージを元に制作された積木の玩具

果たしてそれはアートなのか！？  
ブリロ・ボックスを目撃せよ！

# なんで「ブリロの箱」って、 すごいんですか？



2年前、当館のアンディ・ウォーホルの《BrilloBox》(ブリロボックス)の購入は、大きな話題となりました。「世界一高い箱」とも言われたこの作品の魅力とは何なのか。2024年の夏、県内の中学校・高等学校の先生方を対象とした研修で、一足先に本物のブリロボックスを見ていただきました。鑑賞した先生方の作品に対する第一印象は？

作品《BrilloBox》について聞いてみました！

学校の先生方にお聞きしました

## 「ブリロボックスの第一印象は？」

- ・色の組み合わせが素敵
- ・英語だからかっこいい気もする
- ・中には、何が入っているのかな？
- ・重さは？
- ・自分でも作れそう
- ・何の変哲もない箱にしか見えなのだが・・・
- ・ニセモノだとしても誰も気付かない
- ・作品の価値を見出すのは難しい など



赤井あずみ  
学芸員より

この作品が発表されたのは1964年、今から60年前のこと。商業デザインの世界で活躍していた作者のアンディ・ウォーホルは、スーパーマーケットに並ぶ商品のパッケージを「アート」の世界に持ち込み、当時話題の人となりました。彼の代表作《ブリロボックス》は、家庭用品のメーカーである「ブリロ社」が販売していた洗剤付きのスチール製のわしが入った段ボール箱をモデルに、色も形もサイズもそっくりそのまま複製した

100個の木箱のこと。「個性」や「オリジナリティ」こそがアートだと思われていた時代に、「無個性」のどこにでもある「コピー品」をアート作品として発表したウォーホルは、この作品で、アートの常識をひっくり返し、大量生産・大量消費の社会における新しい美学—**身近な日常や生活の中にも「美」はあるのだ、と提案したのです。**誰も気づいていない、見向きもされないものの価値を見つけるのは、ほんの少し視点を変えてみることなのだと思います。

## ちなみに

価格が高くなっているのは、ウォーホルはとても人気があり、世界中に高額でも手に入りたい人がたくさんいるからです。版画などの作品も、高騰し続けています。



アートには答えがないので、どう捉えても正解です。「よーわからん」や「モヤモヤする」もあって当然。むしろ、そんな感覚にどっぷりとひたれる作品の一つなのかもしれません。ただ、賛否両論、すごいのかすごくないのか、アートなのかそうじゃないのか、そんな議論をしている時点で、ウォーホルの術中にはまっているのかもしれません！兎にも角にもそんな《ブリロボックス》を、まずは実際に見てみませんか？展示スケジュールをHPでご確認の上、ぜひお越しください。

## レポート！

### 鳥取県立美術館ボランティア「TMOA+」 (ティーモア・プラス) 交流会を開催



美術館の開館が迫る3月1日(土)に、国立アートリサーチセンター主任研究員の稲庭彩和子さんに、これからの美術館が果たすべき様々な役割についてお話いただきました。また「この美術館を、どんな場所にしたい？」をテーマとしたグループディスカッションでは、画期的なアイデアも飛び出し、交流を深めつつ、今後の活動への想像が膨らむ楽しいひとときとなりました。

## みんなでOO！

2月23日(日・祝)に、第2回朝鑑賞シンポジウム「朝鑑賞で安心・安全な学校づくり」を開催しました。武蔵野美術大学の三澤一実教授をコーディネーターに、実践発表6名とパネリスト5名によるパネルディスカッションを行いました。その模様を、国内外のリモート参加の方にも配信。熱を帯びた会場内と合わせて、およそ200名の方々にご参加いただきました。鳥取が「朝鑑賞」の聖地に！

イベントの記録動画を公開中→



いま話題の  
「朝鑑賞」を  
美術館から発信！

## NEWS

### “MUSEUM START BUS” が、いよいよスタートします!!

県内の小学4年生のうち、令和7年度の前期は計65校2429名の子どもたちがバスで美術館へやってきます。来館時には、子どもたちのグループに対話鑑賞のファシリテーター研修を受けたティーモアさん(県美ボランティア)が付き、おしゃべりしながら、作品鑑賞をナビゲートします。子どもたちの文化的な体験の場の一つとして、この取り組みを開館から10年以上続けていく計画としています。

